

石 仏 散 歩

すとーん・さーくる

No.108

発行 新潟県石仏の会(代表 星野 紀子)

2020年5月20日 発行

事務局 ☎945-0837 柏崎市三島町16-2 渡邊三四一 電話0257-22-1941

ホームページ <http://niigata-sekibutu.voxx.jp>

石 仏 散 歩

野々海峠と深坂峠の石仏

上越市 水 島 健 吾

上越市の東方に広がる関田山脈は信越国境でもある。南の斑尾山（二三八二m）から北の天水山（一〇八八m）まで弓なりに、標高一〇〇〇m前後の山並みが続く。古代から近世まで多くの峠道が開削され、その多くは塩の道であった。

富倉峠、関田峠、牧峠など主要道と比べ、北方向にある野々海峠（のみとうげ）と深坂峠（みさかとうげ）は少し地味な峠道の感があるが、峠開削は一番古いと伝わる。野々海峠は旧大島村菖蒲と信州栄村白鳥、飯山西大滝を結ぶ。また深坂峠は旧松之山町浦田と栄村白鳥とつながる。

「古代大和政権が蝦夷対策の最前線、渟足柵や磐舟柵に越と信濃の民を柵戸（きのへ）として送り出した。その後、上野や尾張、信濃などの民二〇〇戸を配置させたが、その民達が千曲川沿いに東山道脇道としての野々海峠、深坂峠を越えて柏崎方面に出た」（飯山市誌）と云われている。和銅五年（七一二）、出羽国成立に伴い、越後国範囲が確定するが、以降、それまで渟足柵周辺にあった国府が頸城郡に置かれるようになる。必然的にこの二つの峠道は利用頻度が下がるが、道筋は一部大きく変更されながら峠として今日まで残った。

野々海峠（一一〇〇m）辺りは冬季七〇八mの積雪があり、雪解けも遅い。峠から菖蒲側にしばらく行くと遭難供養仏が二体置かれている。天保五年



野々海峠の遭難供養仏



深坂峠の「馬頭観世音」文字塔

（一八三四）に雪崩の犠牲者の供養として建立された。左、聖観音、右、地蔵と思われる。菖蒲には番所も置かれ、冬でも通行があった。明治初期の駅制によると菖蒲から西大滝まで三里十町で、継立料は人足一人十五銭、馬一疋三十銭、雪中深浅により一五割増とある。また、文化年間（一八〇四）一八）、箕作村（栄村）の大庄屋島田三左衛門は三人の娘を大島村に嫁がせている。その為、野々海峠道筋を幅七尺に改修したという。長女は菖蒲念宗寺に嫁ぎ、明治四年（一八七一）に八十六歳で没しているが、寺の過去帳には弘化四年（一八四七）の善光寺地震により、偶々御開帳で参拝中であった菖蒲村の九人が亡くなつた記載があるという。

一方、深坂峠（一〇八〇m）も「浦田村誌」によれば、元文四年（一七三九）に深坂峠の改修が終わると、浦田村の米や柏崎方面からの魚介類、塩などが多く信州に送られ、村も賑わつたという。白鳥村には二軒の問屋があつたと伝わり、旧峠には浦田村の人人が明治十年に建立した馬頭観世音塔が、今も信越の交流の証として残されている。

紙上見学会
—いといがわ編—

延喜古道の石仏と芸能

上越地区見学会実行委員会

上越地区石仏見学会によること。新型コロナウイルス感染防止のため本年度は見学会の実施を見送りましたが「ステイホーム」の趣旨に沿つて紙上見学会を企画しました。外出自粛のお慰みになれば幸いです。



西頸城地方の延喜古道（出典：ホームページ「古道 塩の道」）

◆西頸城地方の延喜古道

延喜古道とは、平安時代に律令制により定められ、延喜式に掲載された畿内と諸国の国府を結ぶ官道のこと。上図のように西頸城地方の北陸道の本道は浜往来ですが

風波によって通行ができないときは山往来も利用されました。又信濃から大網峠を越えて山寺を経由し水穂寺へ至る千国古道は東山道と北陸道を繋ぐ最短ルートとして古代から重要な役割を担いました。今回の紙上見学会はこれらの古道に点在する石仏と芸能をハイライトでご案内します。

◆奴奈川神社の道祖神



旅の始まりは日本海に面した北陸道沿いの田伏（たぶせ）からです。

奴奈川神社は越後ときめき鉄道梶屋敷駅の西に鎮座し、出雲大社の祭神大国主命

（おおくにぬしのみこと）と結婚して諏訪大社の祭神建御名方神（たけみなかたのみこと）を産んだ奴奈川姫命（ぬながわひめのみこと）が祀られており、祭礼には巫女舞「浦安の舞」が奉納されます。



国道八号線に面した北参道入口に「禁汚
礪（おわい）」と彫られた結界石があり、境内には自然石の道祖神が祀られています。しめ縄が巻かれ、横書きで「道祖神石 道路守護」、縦書きで「金精鉄開守 男根女根のわざらいを祓い直す 又男ノ根ノ常ならず無勢（精）なるときも乃手向仕心じん（信心）すれば優勢（精）を得ることいちじるし（著し） 右奉書 敬白 嘉永五年庚申日」と信仰の内容が刻まれています。道祖神は境の神であると同時に豊饒をもたらす性神の機能を与えられていることも多いようです。

◆天津神社のけんか祭り

天津（あまつ）神社は奴奈川郷の一の宮で御祭神は伊勢神宮外宮相殿の祭神と同じ、天津彦々火瓊々杵尊（あまつひこひこほににぎのみこと）、天児屋根命（あめのこやねのみこと）、太玉命（ふとだまのみこと）の三柱です。



舞楽「陵王の舞」（出典：ホームページ「いといがわベース」）

突き出た石舞台で奉納され、祭の雰囲気は動から静の世界へと一変します。この舞楽の歴史は古く、三百年以上続いているとされています。神楽や田楽、風流踊とも趣が異なることから、能や風流が出現する前に創造された日本の舞と考えられています。

古い形式をよく残し、大阪の四天王寺の舞楽の流れを汲むものとされながら郷土色が織り込まれ、「能抜頭（のうばとう）」や「華籠（けこ）」などの舞は天津神社だけに伝わる演目です。奉納舞楽の最後に舞われる「陵王（りょうおう）の舞」は十二演目の中でも最も注目を集める舞です。この舞は中国の武将「蘭陵王」が敵を勇壮に打ち破る様を表したものといわれています。今年は残念ながら奉納行事は中止となりましたが市指定登録文化財の石造如来型坐像の他鳥居、狛犬、舞楽が行われる石舞台など神社ならではの石造物は見応えがあります。

◆蓮台寺の五百羅漢

旧蓮台寺村は一の宮村と共に近世まで伊勢神宮領でした。そのためでしょか延喜古道は当地を通っています。

四月十日の大祭は糸魚川に春を告げる「けんか祭り」として知られ、五穀豊穰・豊漁を祈願して押上、寺町の若衆が二基の御輿をぶつけ合う渡御競争を行い、午後と翌日には「稚兒舞」といわれる十二番の舞樂（国指定重要民俗文化財）が境内中央に



七社大神は神仏混淆（こんこう）で社殿と並ぶ應供殿に須弥山（しゅみせん）を模した四角錐の階段状の頂点に釈迦如來が安置さ

の発願で、托鉢により淨財の喜捨を募り天保三年から十一年の歳月をかけて建立したといいます。人々は親しみを込めて羅漢和尚と呼びました。境内には庚申塚、猿田彦大神、相馬御風歌碑などがあります。

◆水保の十一面觀音

旧水穂寺村は延喜古道と姫川谷・信州へ通ずる御前山道の分岐点で交通の要所でした。古くは吉祥院支配の七坊があり総称して水穂寺といつてました。養老年間泰澄を開祖とする説と弘法大師が開基し坂上田村麻呂が草創したという説があります。明治の廢仏毀釈で觀音堂だけが残りました。



境内には資朝の供養塔（五輪塔）の他聖観音、馬頭觀音、地藏菩薩、大乘妙典一千部読誦（どくじゅ）供養塔、層塔、残欠五輪塔群など多くの石仏、石塔があります。代わりになつて切られたためということです。

◆雲台寺の石仏群

雲台寺は西海谷の奥、駒ヶ岳の麓の御前山（ごぜんやま）にある天台宗寺院です。豪雪地で集落は過疎化、無檀家の同寺は一時廃寺となりました。本尊は十一面觀音で越後三十三觀音の一つですが、近年盜難にあつてしましました。



◆金蔵院の板碑

根知（ねち）谷は姫川の東岸の山谷で、雨飾（あまかざり）山、大網峠で信越国境に接し中世には越前、越中からの長野善光寺詣は多くが根知谷の道を通ったといわれます。山寺集落は根知川右岸にあり、かつて天台宗千手院を中心に金蔵院（こんぞういん）など十二坊があり密教修行の拠点であつたといいます。戦国時代には僧兵を抱え上杉氏のため働いたと思われ、天正年間上杉・武田兩氏の戦いで堂は焼き払われ以後衰退します。中でも馬頭觀音が多く、かつて七

した。明治初年千手院は廃寺となり日吉神社の寺中であつた金蔵院だけが残されました。金蔵院は始め天台宗でしたが後に真言宗に宗旨替えしています。



金蔵院に県内では珍しい在銘の板碑があり、山型の額部にキリーケ（梵字）、中央

に「南無阿弥陀仏」の名号、左右に「永和二年妙安」「五月二日敬白」、下部に蓮華の花が彫られています。南北朝の争乱で北朝方に従つて文和元年（一二五二）藏王堂城（長岡市）で討ち死にした当地の豪族称智大炊助（ねちおおいのすけ）一族に由縁を持つ墓碑ではないかとされます。参道の両側の石垣の上に三十三所観音と網代笠で錫杖を持った弘法大師像他奉納八十八番、奉納百番供養塔、奉納六十六部供養塔などが整然と並んでいます。

近くの觀音堂にも同様の数多くの石仏や供養塔がありこの土地の信仰の篤さを今に伝えています。

◆日吉神社のおててこ舞

山寺集落上手に根知谷の惣社日吉神社があり、毎年九月一日、日吉神社の祭礼に奉納される「おててこ舞」と呼ばれる五百年近い歴史を持つ芸能があります。正式には「根知山寺の延年」といいます。延年とは「週令延年（かれいえんねん）」のこと、「週令」は年を取ること、「延年」は寺院で法会の後に行われた余興の芸能を指すことから、芸能で心をやわらげ、長寿を願う舞いを意味します。奉納する十曲の一番「おててこ舞」が祭りの名として知られるように



「おててこ舞」（出典：ホームページ「糸魚川観光ガイド」）

なりました。県内唯一の延年芸能として国的重要民俗文化財に指定されています。はたして今年は実施されるでしょうか。
まだまだ見どころはたくさんありますが紙面の都合で今回の紙上見学会はこれまでとします。来年の見学会の計画は未定ですが、四月の天津神社舞楽または九月の山寺の延年に合わせて実施できればと考えています。ではウイルス感染に気を付けてお過ごしください。

（文責 やまだ漫歩）

事務局だより



新潟県石仏の会 創立30周年記念事業に向けた30周年事業準備委員会

本会は平成五年（一九九三）春に発足し、

令和四年（二〇二二）に創立30周年を迎える。10周年では『越後・佐渡 石仏の里を歩く』の記念出版、20周年では企画展

「石仏の力」（会場：県立歴史博物館）を開催し、その確かな実績を歴史に刻んできました。

振り返ってみると、これまで周年事業は、石仏の魅力を社会に向けて広く発信し、わかりやすく伝えることが目的であつたように思います。30周年においても、これまでの周年事業の方針を継承し、以下の事業計画案を立てました。

1. 季刊会報『すとーん・さーくる』バックナンバーの製本

『すとーん・さーくる』（以下、会報）は年三回（設立当初は四回）発行し、本号で一〇八号になります。ホームページ環境の整備により、一〇〇号以降のバックナンバーは、インターネット上で閲覧できるようになりました。しかし、それ以前のバッケナンバーについては会員外の入手が難し

く、図書館でも閲覧できません。

そこで、30周年事業として、会報のバッケナンバーの残部を製本したいと考えています。その合本は県内の主要図書館に配架・保管し、将来にわたり広く活用できる環境を整えます。会報に掲載された「石仏散歩」など、会員の皆さんのが各地を歩いて調べた貴重な情報は、石仏研究にとどまらず、今後の郷土史研究や地域学習に役立つに違いありません。

2. 道祖神をテーマとした写真展の開催と書籍刊行

20周年事業の企画展「石仏の力」では、その準備段階で作成した石仏データベースをもとに、種類別の分布や建立年代の推移等を紹介しました。30周年事業では、このデータベースを活用して道祖神の追跡調査を実施したいと思います。

石仏データベースによると、県内の道祖神は八三五件あります。30周年事業では、県内の道祖神の所在確認と写真記録を実施する計画です。その実現に向けて、各地区の会員には、道祖神の所在情報の提供や追跡調査についてご協力ををお願いしたいと考えています。

として挙げさせていただきました。これは別に、上越地区でも見学会資料の活用やデータベースの整備等を計画していると聞いています。

新型コロナウイルス禍の見えない先行きの中、団体での行動や遠出はしばらく自粛ムードが続くかもしれません。しかし、身のまわりにある石仏を歩く、見る姿勢は変わることなく持ち続けたいものです。足もとの文化財である石仏は、私たちに多くのことを語りかけてくれます。まずは足もとの道祖神を皮切りに、明日に向かって力強く新たな一步を踏み出しましょう。



高柳の双体道祖神
(井上光威氏撮影)

編集後記

最終的には、この成果をもとに写真展の開催や、書籍刊行を予定しています。写真展は上中下越の各地区で巡回展を開催し、あわせて講演会や講座等を実施できたら周年事業としても盛り上がることでしょう。

以上、30周年事業準備委員会からの素案

本号編集担当 上越地区事務局